

### (3) 上野国分寺の記録

① 長元3年の国司交替の際に作られた「上野国交替実録帳」の金光明寺（国分僧寺）項は、国分寺の実状が記された全国で唯一の文書として知られています。

<p>無實 築垣壹廻 四面貳町 長參佰貳丈壹尺 同前日記云、无實者 今檢同前</p>	<p>○ 中 略</p>	<p>丈六十一面觀音像壹軀 件觀音像、依長保三年五月十九日官符、前 前司平朝臣重義奉造供養、即安置金堂者 同前日記云、左右御手无實、持堂悉以破損者 今檢同前</p>	<p>○ 中 略</p>	<p>右脇士文殊師利菩薩壹軀立 高一丈 金色 同前日記云、押金所所剥落也、蓮花座葩无實者 今檢同前</p>	<p>左脇士普賢菩薩壹軀立 高一丈 金色 同前日記云、押金所所剥落、蓮花座葩皆以無實者 今檢同前</p>	<p>破損 釋迦丈六壹軀 安座高八尺 金色 同前日記云、眉間无實左光之飛一軀朽落也 今檢同前</p>	<p>「萬壽元」 寛仁申年交替日記云、全者 今檢同前</p>	<p>□ □ 无實事 金光明寺 銅鐘壹口</p>	<p>國分二寺諸定額寺佛像經論資財雜具堂塔雜舍并府院諸郡官舍</p>
--	--------------	--	--------------	---	--	--	--	----------------------------------	------------------------------------

【史料4】「上野国交替実録帳」金光明寺項

② 破損と無実（既に滅失）に分けて、対象となる仏像・仏具・資財、堂塔などの状況を箇条書きにしています。はじめに金堂に安置される本尊の釈迦三尊像など法量と破損状態を記載しています。いずれも破損がありますが、国司は彩色など修理を施した実績を主張しています。

③ 長保3年（1001）5月19日の太政官符に基づいて、前前国司の平朝臣重義が丈六十一面觀音像1体を造り金堂に安置したことが書かれていますが、これも御手などが破損していました。

④ 金堂はかなり健全な状態を保っていたことがわかりますが、伽藍地を囲む長大な築垣や大門は再建されず全壊のままになっていました。

⑤ 奈良時代の天平13年（741）2月の聖武天皇の勅により創建造営が始まった上野国分寺は、天平勝宝元年（749）頃に全国に先駆けて七重塔・金堂などが完成しました。それから280年近くを経て築垣や大門は全壊していましたが、塔・金堂・講堂は姿を保っていたのがわかります。

⑥ このことは、史跡上野国分寺跡の発掘調査による遺構の状況や多くの型式の軒瓦・文字瓦などの出土品からの見解と一致しています。古代の記録と発掘調査とから、衰退期の国分寺の姿と280年もの間管理・維持されてきた事情を探ることができる全国で唯一の例です。



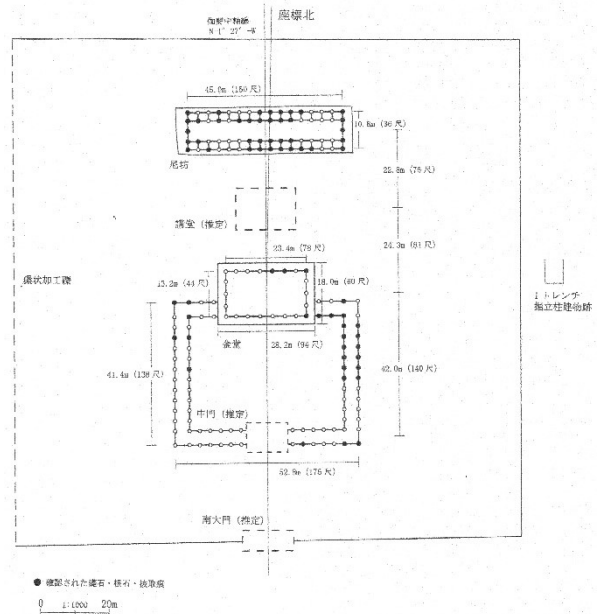
【図表17】参考 金堂の釈迦三尊像（姫路市 書写山円教寺大講堂の釈迦三尊像・10世紀）

## 7 上野国分尼寺の姿

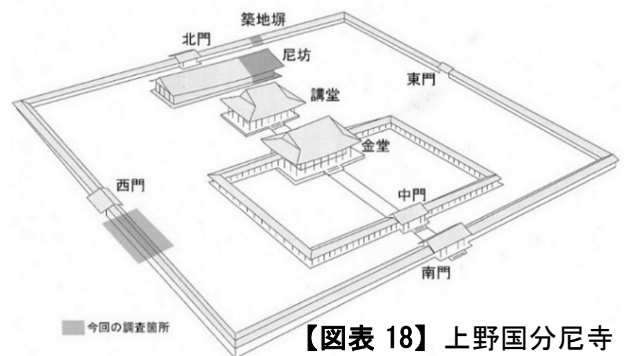
### (1) 上野国分尼寺の発掘調査

2016年（平成28）から高崎市教育委員会が実施している発掘調査で、次のような伽藍地の様子が明らかになってきました。

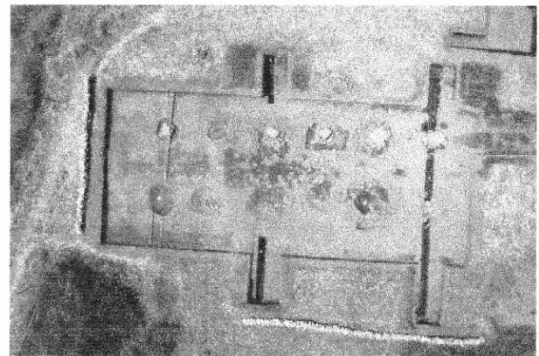
- ① **伽藍地** 東辺と北辺で築地塀とその両側にある溝が確認されました。北辺では多数の瓦が出土しており、瓦葺築地塀であったとみられます。伽藍地の規模は162m（1町半）四方と推定されます。
- ② **尼坊跡** 地業（土を平坦に均して固める基礎工事）は東西51m×南北13.5mで、その上に東西15間（桁行45m）×南北4間（梁間10.8m）の礎石建物がのります。南北両面に廂をもつ切妻建物で、これまでに全国で見つかったニ坊跡で最大級であるのがわかりました。
- ③ **講堂跡** 尼坊跡の南側で径1m前後の礎石が2個見付き、尼坊に使われているものより大きいことから講堂のものと推定されます。その近くからは、凝灰岩切石や瓦塔の破片が出土しました。
- ④ **金堂跡** 東半部の調査で見つかった礎石抜き取り痕などから、地業は東西28.2m×南北18mで、その上に東西7間（23.4m）×南北4間（13.2m）の礎石建物がのると推定されます。低い基壇をもち、外側には凝灰岩切石や平瓦を並べた外装が施されていたようです。
- ⑤ **回廊跡** 北面は金堂南面に取り付くことが確認され、南面は中門に取り付くと推定されます。東面では礎石5個がほぼ原位置で残存しており、単廊で梁行4.2m、柱間は東・西面3.0m・北面3.6mの等間となります。全体の規模は東西52.8m×南北41.4mとなります。
- ⑥ **出土瓦** 各地でこれまでに調査されている国分尼寺では瓦葺建物は一般的でない中で、金堂の主要堂宇は総瓦葺きであったとみられます。
- ⑦ **創建時期** 創建造営用の瓦は笠懸瓦窯群で生産された国分僧寺と同じものが使われており、僧寺と余り時間を隔てずに工事が始まったことを示しています。吉井・藤岡瓦窯群、秋間瓦窯群（安中市、旧碓氷郡）などで生産された瓦が使われているのも、僧寺の場合と同様です。
- ⑧ **廃絶時期** 上野国分僧寺跡出土の最終段階とされる型式の軒瓦の出土は確認できず、尼寺への瓦の供給は9世紀末から10世紀前半に終了したと推定されます。「上野国交替実録帳」から判明した上野国分僧寺の状況と比較すると、100年近く前から伽藍の衰退が進んでいたようで、11世紀代には堂宇の建築部材が焼却されていました。



【図表 18】上野国分尼寺跡遺構全体図



【図表 18】上野国分尼寺  
伽藍地推定図



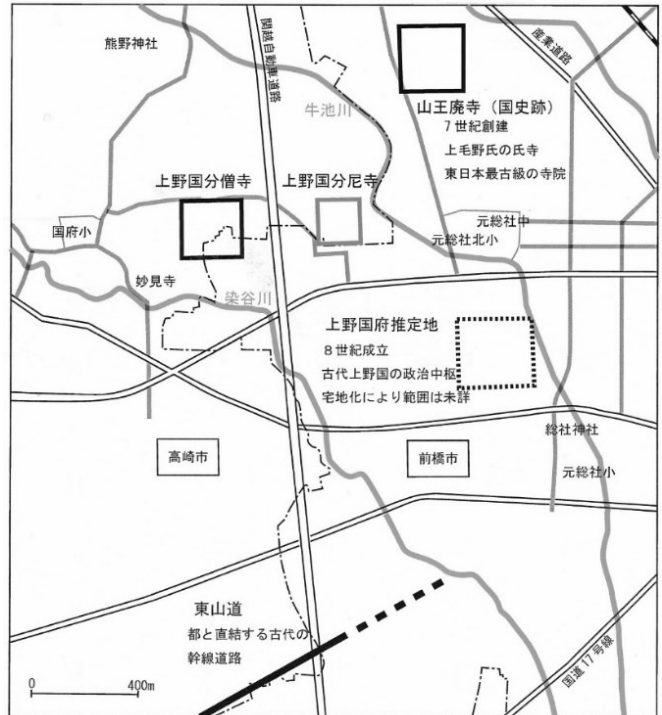
【図表 19】上野国分尼寺跡東面回廊の  
調査状況（礎石が並んでいる）。

## (2) 上野国分二寺の調査

これまでの上野国分寺跡と上野国分尼寺跡の調査成果を照合して、地域社会とのかかわりを含めた注目点をあげてみます。

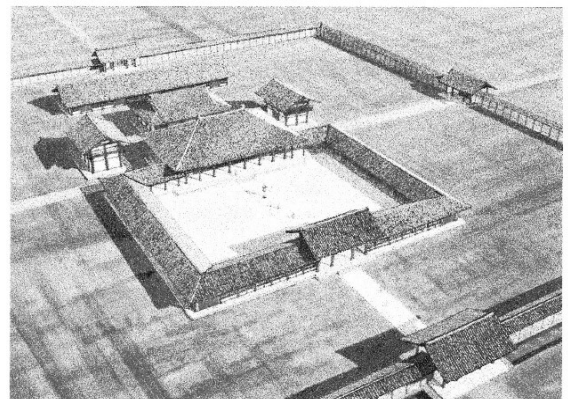
① **伽藍地** 上野国府（推定地）の北西側に、西に僧寺・東に尼寺が366m余（ほぼ3町）の間隔に並び、ほぼ正面位置と方位を揃えて建立されました。僧寺は南北231m×東西219m（ほぼ2町四方）、尼寺は東西南北162m（ほぼ1町半四方）と差がありました。

② **堂宇 金堂**の規模は尼寺（80×44尺）が僧寺（2期調査で地業のみが確認された、76×42尺）より僅かに大きくなっています。**講堂**は僧寺（以前には金堂跡とされていた）よりも小規模と推定されます。僧寺には金堂と塔が東西に並んで在りましたが、尼寺跡には塔跡に相当する遺構や痕跡はみつかりません。**回廊**跡は僧寺では地業が僅かに残るだけですが、尼寺跡では地業と原位置を保つ礎石が並んで残り、僧寺の姿を復元するうえで重要な根拠となります。



③ **記録** 「上野国交替実録帳」には「**国分二寺**」の記載があった筈ですが、**金光明寺（僧寺）**項には多くの記録が残っているのに対し、**法華寺（尼寺）**項には群馬郡小野・井出・八木・上郊郷に寺田40.3町分が置かれていた記載があるだけです。僧寺は発掘調査の成果を史料と細かく照合できる全国唯一の遺跡ですが、遺構の残存状態が悪い部分が多くあります。遺構の残存状態が良好な尼寺跡の発掘調査の成果と比較で、**回廊**のように不明な点を補うことや、疑問点として残る事象を解明する手がかりとなることが少なくありません。これを上野国分二寺が持つ貴重な意義とみることができます。

【図表 20】上野国分二寺周辺の遺跡（概略図）



【図表 21】上野国分尼寺推定復元図

④ **出土瓦** 生産地は創建造営から修繕用を通して、僧寺と同様な状況がみられます。その中で創建造営用の瓦の押印「**洌**」（佐位郡洌名郷からの供給を示す）は僧寺跡からの出土がみられないことに注目されます。国分二寺用の瓦の生産・供給や知識編成で、地域による分担の違いがあった可能性を示しています。



【図表 22】上野国分尼寺跡出土瓦の押印「洌」（鏡文字、拓本）

⑤ **地域社会** 国分二寺の創建造営は全国土を網羅するようにして始められましたが、発掘調査で明らかになった上野国での状況は、瓦の生産・供給では僧寺と尼寺ともに中東部の勢多・佐位・山田・新田郡、南西部の碓氷・多胡・緑野郡とのかかわりが深かったことがわかります。運営段階では、南西部の碓氷・多胡・緑野郡がかかわっていたことも共通しています。山上碑の「放光寺僧」・金井沢碑の「群馬郡下賛郷」「知識」、古代の放光寺跡である山王廃寺跡の発掘調査の成果を合わせると、地元の群馬郡の人びとも知識として尽力していたとみることができます。

## おわりに

- (1) 天平13年(741)2月の聖武天皇の勅に始まる国分二寺の創建造営では、天平19年(747)11月の詔にみられるように七重塔を備え「国華」と称された国分僧寺に力が注がれました。その後の記録をみても、天平勝宝元年(749)7月に整備された寺院制度からも明らかなように、政治的には「国分寺」とも呼ばれた僧寺の運営が優先されました。尼寺の創建や運営に言及する史料が少ないのはその表れといえます。
- (2) 国分二寺は国家鎮護の經典である金光明最勝王經、懺悔滅罪や除災招福の經典である法華經を併せ備えることに意義をもって創建されました。しかし、天平神護2年(766)8月の太政官符に明らかなように、巨大な堂宇の建設と広大な伽藍地の維持管理には膨大な費用と労力が必要でした。
- (3) 律令政治の混乱や財政の衰退が進むと二つの寺を共に維持することは難しく、国家鎮護の僧寺の方に力が注がれるようになりました。「上野国交替実録帳」金光明寺項の記事から、そうした状況を読み取ることができます。
- (4) そうした中であって、上野国では天平勝宝元年(749)の知識への叙位にみられる創建造営で地域を挙げての政策への協力、上野国分二寺跡出土の瓦・押印瓦でわかる創建造営から運営にかけての広範な知識の編成、「上野国交替実録帳」金光明寺項に載る国司の職務への取り組み、そうした点で全国の模範となる存在であったといっていよいでしょう。
- (5) これは国分二寺の創建造営に先だって、山王廢寺(放光寺)・上植木廢寺・寺井廢寺など地域の氏族が建立した寺院の存在と、そこでの経験の蓄積が大きく寄与したとみることができます。それらの中心となった上毛野朝臣氏・檜前部君氏など、地域の伝統的氏族が中央政権と強い繋がりをもっていたことも影響したでしょう。
- (6) 「3地域社会を知るための資料(2)上野国地域に係わる資料」で挙げた、〔B「上野国交替実録帳」・上野三碑〕の存在によって、〔A上野二国分寺〕と地域社会とのかかわりを歴史的な広がりをもってみることができる点で、全国にも稀な例として注目される存在となっています。
- (7) 国分尼寺が果たした歴史的役割は、史料研究でも遺跡調査においても具体的な様相を知ることが難しいのですが、この度の上野国分尼寺跡の発掘調査の成果はその進展に道筋をつけるものといえることができます。古代の地域社会の姿をより明らかにするためにも、上野国分二寺の調査研究が進められることを期待しています。